

国語科学習指導案

日 時 平成24年 5 月 25 日（金） 1 校時

対 象 1年2組(男子20名 女子20名 計40名)

指導者 教 諭 入 佐 俊 和

1 単元（教材）名 鑑賞文を書こう（「鑑賞文を書こう」〔三省堂〕）

2 単元設定の理由

(1) 教育的意義

現代は情報機器のめざましい発達により、時や場所を問わず多種多様な手段で情報を交流することができる。その一方、情報機器の日常的な利用により、文字言語のやりとりによるコミュニケーションの質が低下している。その一例として、電子メール等の普及によりだれでも情報を手軽に発信できるという便利な面もあるが、単語の羅列のみでコミュニケーションが成立することから、短い言葉で用件を済ませてしまう人がある。その結果、相手に自分の考えや意見を適切な文章や言葉で伝えることができない人や、自分の思いや考えを、文章として表現することを苦手とする人が増えてきている。

このような状況は、中学生も例外ではなく、自分の思いを文章にまとめることを苦手とする生徒が多い。また、自分の思いを相手に伝わるように工夫して表現することができない生徒や、相手の立場などを深く考えずに一方的に自分の思いを書く生徒もいる。

そこで、語句や表現に込められた意味や作者の思い等を捉えながら詩を読む活動を通して、詩に込められた作者の思いを理解する力を身に付けさせる。あわせて、自分が紹介する詩の一つを選び、その魅力を紹介するための鑑賞文を書くことによって、的確に文章を書く力を身に付けさせたいと考えて本単元を設定した。

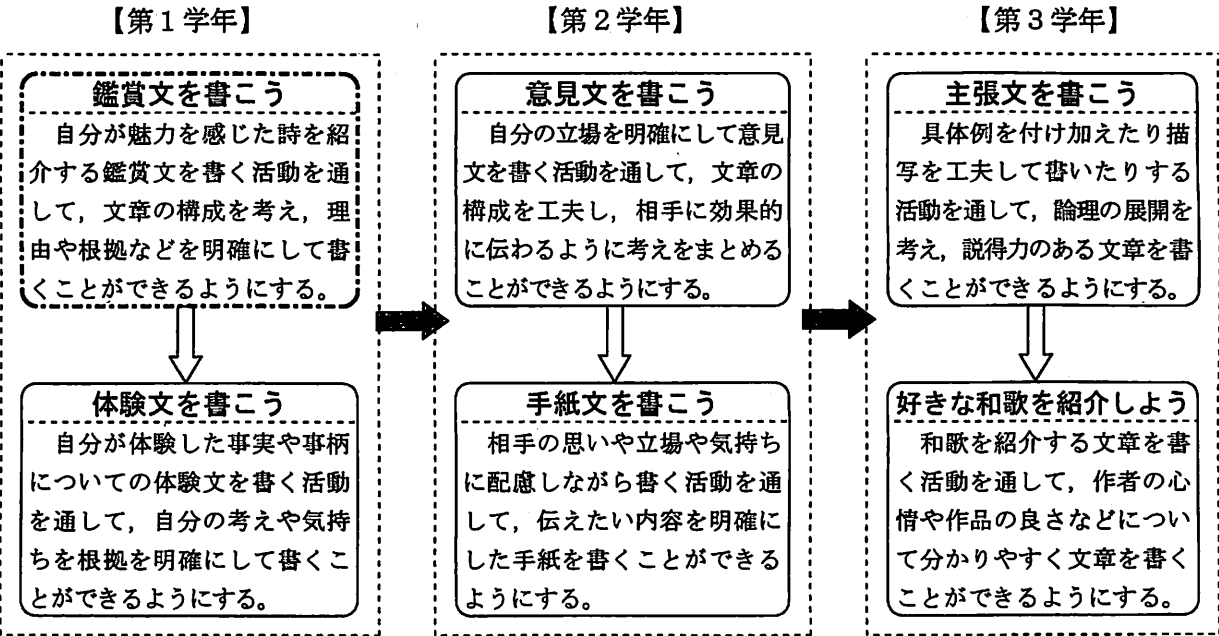
本教材「鑑賞文を書こう」では、鑑賞文を『私の感覚・感情』に基づいて作品について語る文章」と定義付けている。鑑賞文を書くために、作品に対してどのような感情を抱いたか、それはなぜなのかを考えさせたり、そのものを見ていない人にもイメージが伝わるように文章にまとめるにはどうすればよいのかを考えさせたりする展開になっている。鑑賞文の書き方を学ぶだけでなく、相手意識をもって文章を書くことの大切さを学ぶことができる教材である。

具体的には、単元を通して「選んだ詩の魅力が相手に伝わるように鑑賞文を書く」という学習活動を行わせる。鑑賞文を書くためには、詩の語句や表現、作者の思いなどを読み深める必要がある。そのために、まず、自分が選択した詩の魅力はどこにあるのかを観点を明確にして読み深めさせたい。うえで、鑑賞文を書かせるために構想表をまとめさせたい。その際、他の詩を選んだ友達の記事を参考にさせたり、構想表を交換して読み合わせたりさせながら、鑑賞文に書く事柄を焦点化させるとともに、鑑賞文の構成についても考えさせていきたい。さらに、鑑賞文を交換して読み合うことを通して、友達を書いた鑑賞文から他の詩の魅力を理解するとともに、鑑賞文の書き方について意見を交換したりアドバイスをしたりしながら今後文章を書く参考にさせていきたい。

このような活動を通して、生徒は読み深める力を高めるとともに、自分が伝えたいことを的確に書く力を高めることができるようになるものと考えている。

(2) 連関的意義

本単元は、ねらいと教材・学習活動の構成の系統において以下のような関連をもつ。



3 単元の目標及び評価規準

【単元の目標】

- (1) 詩に込められた意味や作者の思いを進んで捉えとともに、詩の魅力が相手に伝わるように工夫しながら鑑賞文を書こうとすることができる。

(2) 自分が感じた詩の魅力を、理由を明確にしなが鑑賞文に書くことを通して、段落の構成等を工夫して相手に分かりやすく伝わるような文章を書くことができる。

(3) 三編の詩から一つを選択し、詩の中の語句や表現を読み深めることを通して、詩に込められた作者の思いを理解することができる。

(4) 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意し、語感を磨くことができる。

具体的には次に掲げる内容を重点的に指導する。

評価の観点	評価規準	学習指導要領との関連
国語への関心・意欲・態度	① 三編の詩を進んで読み、内容を理解しようとしている。 ② 構想表を基にしながら、相手に詩の魅力を分かりやすく伝える鑑賞文を書こうとしている。	
書く能力	③ 自分が選んだ詩の魅力とその理由などを観点を明確にしてまとめている。 ④ 自分が選んだ詩の魅力を分かりやすく伝えられるように、構想表を基にして鑑賞文を書いている。 ⑤ 互いの鑑賞文を読み合い、意見や助言を交換し合いながら考えたことや参考にしたいことをノートにまとめている。	ア 課題設定や取材 イ 構成 オ 交流
読む能力	⑥ 三編の詩の内容や表現の特徴、作者の思いなどを捉え、詩の魅力について自分の考えをもっている。	エ 自分の考えの形成
言語についての知識・理解・技能	⑦ 語句の文脈上の意味を捉え、それが詩の中で果たしている役割を考えながら読んでいる。	イ(イ)言葉の特徴やきまり

4 単元の指導計画

(1) 単元設定の視点

ア 生徒の実態から

中学1年生の生徒は、小学6年生の「書くこと」の学習で、事実と感想、意見などを区別するとともに目的に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする力を身につけている。

一方で、本学級は、「書くこと」の学習において、次のような実態が見られる。

- ・ 授業には意欲的に取り組み、友達と積極的に意見を交わしながら授業に参加する生徒が多い反面、書いたことを発表する際に自分の意見に自信がもてない生徒がいる。
- ・ 自分の考えや意見を丁寧にまとめる生徒が多い反面、自分の意見や考えをもっていながら分かりやすくまとめることができない生徒もいる。
- ・ 多くの生徒が工夫して文章を書いているが、一方で思いつくままに文章を羅列してしまい、分量を考えずに文章を書いてしまう生徒もいる。

このような実態から、指導に当たっては、三編の詩の中から一つの詩を選択させ、その詩を選んだ理由や感想、印象に残った語句や表現、作者の思い、共感できるところなど詩を読む上での観点を明確に示して、自分の意見に自信をもたせたい。読み取った詩の魅力をまとめさせたい。また、自分と他の友達の意見を比べさせたり、伝えたい魅力を分かりやすく整理するためにまとめた構想表を互いに交換させて助言させたりすることを通して、鑑賞文に書く内容を練り上げさせたい。さらに、自分が書いた鑑賞文を互いに読み合わせる活動を通して、より分かりやすく友達に作品の魅力が伝わるように文章を書く力を身に付けさせていきたい。

イ 指導上の手立て（本校の研究内容との関連から）

① 言語活動を重視した単元構成の工夫

本単元は、学習指導要領にある言語活動例の「ア 関心のある芸術的な作品などについて鑑賞したことを文章に書くこと」を中心に構成した。自分が選んだ詩の魅力を友達に分かりやすく鑑賞文に書くという言語活動を通して、詩に込められた作者の思いを一層理解するとともに、相手意識をもって自分の思いを伝えることの大切さに気付くことができるものとする。

さらに、鑑賞文を読み合い、意見を交換させたり参考にしたいことをまとめさせたりすることは、豊かな表現力を養う意味でも有意義であるとする。

② 「吟味」による読み深めの工夫

本単元では、自分が選んだ詩の魅力を友達に分かりやすく伝えるために、自分の選んだ詩の魅力を、観点を明確にして読み深めさせることが必要である。

具体的にはまず、生徒に「自分が魅力を感じた詩を選ぶ」という課題意識をもたせ、詩を選ばせる。三編の詩と出会った生徒は、一つの詩を選ぶという課題を与えられることによって、詩への関心を高めることができるものとする。

次に観点を明確に示し、その観点に従って読み深めさせる。観点は読みの視点であり、鑑賞文を書く視点にもなる。三編の詩の中から一編を選択した生徒は、自分を感動させたものは何かという意識をもちながら詩を再度読み深め、観点に従って語句や表現を吟味していくことができるものとする。

さらに、他の詩を選んだ生徒の意見を聞いたり、構想表を交換して読み合ったりする活動を通して、他の人が読み深めたことを理解させるとともに、自分の構想表をより良いものに修正させる。そのことによって、構想表にまとめた内容を更に充実させるとともに、鑑賞文を書く上での参考にさせることができるものとする。

(2) 単元の指導計画(全10時間)

単元	主な学習活動	単元	指導に当たっての手立て	評価
導 入	1 単元を概観し、学習目標・学習活動を確認する。 2 鑑賞文の書き方について理解する。	1	「選んだ詩の魅力が友達に伝わるように鑑賞文を書く」という最終目標を知らせ、今後の学習活動に見通しをもたせる。 - 鑑賞文とはどのようなものか、またどのように書くのかについて理解させる。	評価規準 ①② (観察・ノート)
展 開	3 三編の詩を朗読し、それぞれの詩の初発の感想をまとめる。	1	- 詩を朗読させ、リズムの違いを味わわせる。 - 三編の詩を朗読し、疑問点や印象に残った点などを初発の感想としてまとめさせる。 - 新出漢字や語句の意味を確認させる。	評価規準 ①⑥ (観察・ノート)
	4 三編の詩の初発の感想を発表し合い、それぞれの疑問点を解決する。	1	- 初発の感想を発表し合い、友達の考えを理解させる。 - 初発の感想をまとめるときに出された疑問点をグループや全体で解決させる。	評価規準 ①⑥ (観察・ノート)
	5 三編の詩を読んで、それぞれの詩の魅力や作者の思いをまとめ、最も印象に残った詩を一編選ぶ。	2	- 自分が紹介したい詩を一編選択させる。 - 詩を選択した理由となった語句や表現、内容や共感したところなど、視点を明確にしてノートにまとめさせる。 - 同じ詩を選んだ者同士で意見を交換させ、新たな詩の魅力を再発見させる。 - 詩に込められた作者の思いをノートにまとめさせる。	評価規準 ①⑥⑦ (観察・ノート)
	6 鑑賞文に書く内容を決め、下書きをする。	2 本時 (1/2)	- 紹介したい理由や根拠となる語句や表現などを基に、構想表に書かせる。 - 構想表を基に、鑑賞文の下書きを書かせる。	評価規準 ②③④ (観察・構想表)
	7 下書きを推敲し、鑑賞文を完成させる。	1	- どのようにすれば友達により分かりやすく詩の魅力を伝えられる鑑賞文になるかという視点から推敲させる。 - 鑑賞文を清書させる。	評価規準 ②③④ (観察・ワークシート・鑑賞文)
	8 鑑賞文を互いに読み合い、意見の交換をする。	1	- 鑑賞文を互いに読み合い、理由の明確さや魅力の伝え方について意見を交換させる。 - 友達の鑑賞文を読んで考えたことや参考にしたいことをノートにまとめさせる。	評価規準 ②⑤⑦ (観察・鑑賞文・ノート)
終 末	9 学習を振り返り、終末の感想をまとめる。	1	- 学習を終えての感想を、視点を明確にして書かせることによって、どのような力が身に付いたかを実感させる。 - 学力診断カードを使って、身に付いた力を確認させる。	

5 本時の実際（6／10）

(1) 指導目標

自分が選んだ詩の魅力を友達に分かりやすく紹介する文章を書く活動を通して、鑑賞文を書くことができる。

具体的には、評価規準の④に即して、次の「書くこと」に関する能力の育成を目指す。

十分達成されている	他の詩を選択した生徒を意識しながら、自分が詩を選択した理由や根拠となる語句や表現などを明確にし、書こうとしている内容や順序を工夫して、詩の魅力が友達に分かりやすく伝わるように鑑賞文を書いている。
おおむね達成されている	詩を選択した理由や根拠となる語句や表現などを明確にしながら、詩の魅力が友達に分かりやすく伝わるように鑑賞文を書いている。
達成していない生徒への手立て	- 構想表に着目させ、自分が伝えたい内容や詩を選んだ理由や根拠となる表現や語句を確認させる。 - 友達の文章を参考にさせたり、ノートを見直させたりしながら、自分が感じた詩の魅力を伝えられるよう鑑賞文の内容を考えさせる。

(2) 目標行動（G）

詩の魅力を紹介する鑑賞文の下書きを、構想表を基にして、例えば以下のように書くことができる。

この詩の「水のころ」を扱うように「人のころ」も大切にしていこうというところに魅力を感じます。特に、「すくう」「つつむのです」という言葉からそのことが分かります。「つつむ」という動作も「すくう」という動作も片手ではできません。両手で優しく扱うことで、「そおっと大切に」という思いが伝わります。一方、「つかむ」という行動は片手でもできますが、少し荒い動作です。「つかむ」という動作と「つつむ」「すくう」という動作によって、「そおっと大切に」という言葉が読む人の心に響いてきます。

この詩から、作者の水のように人のころも両手で支えないといけない大切なものであるという思いが伝わります。これは、「ぴったり」という言葉や最後の「も」の繰り返し、倒置法が用いられていることから分かります。

この詩の中で作者が水と人とを重ね合わせているところや、「そおっと」という優しい感じを表す言葉を繰り返し、水のように人も大切だと表現しているところが、自分の心にぴったりと合うと思いました。

(3) 下位目標行動

- ① 友達に分かりやすく伝えるために書く順序を考え、鑑賞文の構成を決定することができる。
- ② 構想表を友達同士で読み合い、助言をしたり質問をしたりしながら参考になるところはないかを話し合えることができる。
- ③ 構想表に自分が鑑賞文に書きたい事柄を、例えば以下のようにまとめることができる。

「水のころ」 - 言葉や表現…（例） 「つかむ」～荒い動作 「つつむ」「すくう」～優しい動作。両手での動き。 「そおっと」～優しさ。 「そおっと…」の繰り返し～強調したいところ。 - 作者の思い…大事なものはやさしくしないと伝えたい。 - 共感できる場所… - 水のころも人のころも、つつみこむようにそおっと大切にすること。	「ころのすみっこに…」 - 言葉や表現…（例） 「すみっこ」「はじっこ」 ～自分が安心できる場所。 「もうひとりのぼく」 ～別な考えをもつ自分。 「イスを置いて」の繰り返し ～落ち着かない自分。 - 作者の思い…心の動きは複雑であるということを伝えたい。 - 共感できる場所… - ひとりでじっくり考えたのだけれど、別の自分があらわれてなかなかじつじつと考えられない自分がいるところ。	「小学校の椅子」 - 言葉や表現…（例） 「ながいながい」 「みじかいみじかい」～対比。繰り返すことで強調。 - 倒置法～「木の椅子」を強調している。 - 作者の思い…冷たいが実は誰もが温かなれる場所が小学校の椅子である。 - 共感できる場所… - なつかしい思い出の場所である小学校の椅子は、さわるとつめたいけれども、実はあたたかみがあるところ。
--	--	---

- ④ 相手に分かりやすく自分の思いを伝えるためには、構成を考えたり、他の詩を選んで友達を意識して魅力を伝えたりする必要があることを理解することができる。
- ⑤ 自分が捉えた詩の魅力と友達の発表から分かった詩の魅力を参考に、構想表に書く事柄を加味・修正することができる。
- ⑥ 自分が選択した詩の魅力として、詩を選んだ理由や根拠となる語句や表現、共感したところなどを発表することができる。
- ⑦ R 本時の学習目標が、「詩の魅力が伝わるように書く事柄を決めて、鑑賞文の下書きを書く。」であることを確認することができる。
- ⑧ R 前時までの学習を振り返り、これまでの学習を想起することができる。
- ⑨ R 三編の詩を朗読することができる。

(4) 本時の実際

時間	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評価活動
	スタート		
2'	前時までの学習を振り返る。 1 (⑨ R, ⑧ R)	<導 入> - 前時を振り返り、内容を思い出すために三編の詩を朗読させる。 - 前時までに自分が選んだ詩の魅力についてまとめたことを確認させる。 本時は、前時までにまとめた自分が選んだ詩の魅力の中から、鑑賞文に書く事柄を決定し、下書きを書く学習であることを確認させる。 <学習目標> 詩の魅力が伝わるように書く事柄を決めて、鑑賞文の下書きを書こう。	
3'	本時の学習目標を確認する。 2 (⑦ R)		
5'	自分が選択した詩の魅力を発表する。 3 (⑥, ⑤, ④)	<展 開> - 三編の詩の魅力について調べたことを発表させる。 - 発表された魅力を自分が調べた魅力と見比べさせたり、参考にさせたりする。 - 構想表に書く事柄を決めさせる。	○ 自分が選択した詩の魅力を発表することができたか。 (観察・ノート)
10'	加味・修正したことを基にして、鑑賞文の構想表を書く。 4 (③)	- 他の詩を選んでいる生徒に対して、自分がどのような魅力を伝えたいかを考えさせながら構想表を書かせる。 - 自分が取り上げた語句や表現の意味や効果、共感したこと、作者の思いなどを考えさせながら構想表を書かせる。 - 取り上げた事柄が相手にとって分かりやすく魅力が伝わるように修正させたり、付け加えさせたりさせる。	○ 自分が選んだ詩の魅力を構想表に書くことができたか。 (観察・構想表)
10'	構想表を互いに読み合い、より良いものに修正する。 5 (②)	- 友達同士で構想表を読み合わせることを通して、助言させたり、疑問に思ったところを質問させたりして、鑑賞文を書く際の参考にさせる。 - 話し合いを通して気付いたことや考えたことを構想表に書かせる。	○ 構想表を読み合い、より良いものに修正することができたか。 (観察・構想表)
15'	構想表に書かれた内容を基に、鑑賞文の下書きを書く。 6 (①)	<達成していない生徒への手立て> - 構想表に着目させ、どうしてその詩に魅力を感じたのか、その理由や根拠となる表現や語句を鑑賞文に取り上げさせる。 - モデル文を示したり友達の記事を参考にさせたりして、ノートにまとめた内容を基に、伝えたい内容を考えさせる。 <達成している生徒への手立て> - 読み手の立場に立って、自分が選んだ詩の魅力が友達に分かりやすく伝わる鑑賞文になっているかを見直させる。	◎ 構想表を基に鑑賞文の下書きを書くことができたか。 (観察・鑑賞文)
5'	本時の学習のまとめをし、次時の学習内容を確認する。 7	<終 末> - 鑑賞文を書くことができたかを確認し、成長したことを実感させるために、鑑賞文の下書きと初発の感想とを読み比べさせ、その違いを発表させる。 - 板書を基に本時のまとめを行う。 - 次時は、鑑賞文の下書きを完成させることを確認する。	
	ゴール		